（仁徳朝と崇峻朝）

第四十七章　第二期共立時代

（大雀命・宇遅能和紀郎子）

■偉大な応神天皇の遺詔に従い、大雀命と宇遅能和紀郎子の二人が統治者となられた

応神天皇が崩御されたのち一日といえども皇位を空しくすることなく、直ちに次の日も

仁徳即位前紀に、こう記されている。

「先皇謂、皇位者一日之不可空故預選明徳、立為貳」

（先皇（応神天皇）の謂ひしく、皇位は一日も空しかるべからずとのたまひき。故預め明徳を選びて、立てて貳（皇太子）と為したまへり）

■仁徳即位前紀

よび太子宇遅能和紀郎子の二人が統治者となられたように想到される。

■仁徳即位前紀

くはあまり日を経ない頃に、太子大雀命おうちのみことのりしたがうちの

「即かれた」次頁との関係で、
「行われた」では不可！

2,809字 −1/2

(字2797字 −1/3)
(字2796字)

思い巡らす 326

小林 P24

{弐は本来の字
弐は後代の字

とある。

なるほど、通常、貳は「まうけのきみ」（皇太子）のこと と解されている。

とはいえ、ここに「弐」（＝貳）の字を用いた真意について思いを巡らせてみるとき、

〈「弐」には、「皇太子」という意味のほかに、――文字通りの「二」（二人の皇太子）の意味も込められているのだろう〉

と思われる。

先述のように、応神天皇薨去当時の朝鮮半島の情勢は、すでに激動の様相を見せ始めていたのである。（第四十六章〈外憂〉の項において既述）

ともあれ、

「皇位は、一日も空しかるべからず」、

という応神天皇の遺詔に従って、王位継承は速やかに執り行なわれねばならなかった。

そして又、

「二人の倭王（天皇）を立てたい」

という応神天皇のお考えどおり、二人の倭王が立って、天下の激変に備えることとなったのだ

ろう。

(字2796−1/2)

19

コクヨ ケ−20 20×20

㊍1728P 神祇令「大嘗祭」

㊍2803P-1/3 紀小
394年9月9日 紀p203
紀上380P 310年2月15日

2,809P-2/2

㊍2813P-4/4

宇治・菟道は弟 紀上382P

㊍2803P-3/3 応神(半代)は難波大隅宮で誕生

ここに二人は、(母の姿をした高塚から生れ出て王位を継ぐ)後国古来の正式な即位の儀式を行う以前に、――応神天皇の意志を重んじ、当日(もしくは翌日)、王位に即かれた。

そして、

㊍2808P 9-10行

①兄、大雀命は、□日辺国□(近畿地方)に留まり、

(朝鮮半島)を間近かに

②弟、宇遅能和紀郎子は、□海北の国□臨む地□宇治□(後の太宰府)へ□下って(否、上って)行かれた。

と推察される。

もっとも二人は、応神天皇崩御(三九四年九月九日であろう)の直後に即位して王位についたとはいえ、高塚から生れ出ておらず、大嘗祭□を迎えていないので、未だ、神々によって正式に認知された大王ではなかった。

国生みを予め述べると、この後、大雀命(仁徳天皇)は、あの有名な□天孫降臨の儀式□、出立に筑紫から生れ

飯豊紀上508P　宇治原皇3K53P　八出比29P　紀上382P 622P　2,810P－1/2　由2805P 1行 由2827P　3年間(飛鳥か近江か)おかれたのか？

出る古来の儀式によって↑↑↑↑↑正式な俊王となり「――――」改めて天上の国から、□日辺国ロ（近畿地方）へ降って行かれることになる。

と解したい。

ただし、因みに述べると、

へ飛神天皇以降、近畿地方で数年間はあり、殯した後に屍を九州地方へ運び、――その後高塚から生れ出て即位し、さらにその直後の大嘗祭で正式に認承されるというのでは、あまりにも空位期間が長すぎるので、いつの頃にか何らかの対策が立てられたのであろう。

と退像される（隋書俀国伝参照）

米

なお、「播磨国風土記」へ揖保郡大家里〉条には、□宇治天皇え世ロとある。

太子宇遅能和紀郎子は、ある時期、実質的上【天皇】と呼ぶにふさわしい地位についておられたのであろう。

また、この物語においては、□宇治天皇ロと□飯豊天皇ロ、□等与刀弥々大だけでなく、

この頁新飯豊建(女帝)

2,810P－2/2

紀上427P 続日本紀350P 630P

王ロ（聖徳太子）、ロ大友天皇ロも、「天皇（弘文天皇）」（あるいは天皇と同等）の地位にあったのでだろう、と思われる。（第一表参照。追々詳述したい。）

そして、履中天皇の長子で、顕宗天皇・仁賢天皇の父である ロ磐坂市辺押羽皇子ロも、極めて短期間ながら大王だったから、ロ市辺天皇ロと称されるのであろう、と拝察される。（「日本書紀」(上)日本古典文学大系、岩波書店、六三〇頁、補注五参照）

米

さて、仁徳即位前紀によると、

■ 大鷦鷯尊は難波に居られ、

① 大鷦鷯尊は難波に居られ、

② 菟道稚郎子は宮室を菟道に興てて居られた、

という。

■ そして、いうまでもなく、通常、

〈菟道稚郎子は、宮室を山城国宇治郡に興てて居処とされた〉

と解されている。

■ しかし本来、――――なんとも突拍子もなく、恐らく、そうではあるまい。

• 恐らく、菟道稚郎子は、北九州の大宰府（宇治）あたりに宮室を興てられたのであろう。

• すなわち、天照大神・月読尊・素戔嗚尊の三者共立の倭国を治められた先例が、ここに再現されることになったのであろう、

と想像される。（既述）

■ すでに第四十六章において述べたように、応神天皇はその昔の華やかな三者共立の時代の〈倭国〉を思い起し、

① 大倭国の都に、匂天照大神の宮を置き、

極めて短期間 ㊥2810P-3/2 ㊥2808P 宇治天皇

2,812P

㊦2798P

㊦2801P-3/2 なお㊦2810P-1/2 14行

㊦2799P-1/2

㊦2798P, 2801P-3/2 来

2801P-3/2 来

㊦2802P-3/2 8行

トル

②東国の新しい領土には大鵠尊を君臨させ、朝鮮半島に主として海北の国に対する政策は蒐道稚郎子にまかせて大鷦鷯尊を以て輔佐させる下という構想を抱かれたように想像される。

米

なおこの物語においては、第Ⅲ表に示すように

(1)天照大神・月読尊・素戔嗚尊の三者による統治の時代を、□第一期共立時代□

(2)応神天皇の遺詔によって実現した、天照大神・大雀命・宇遅能和紀郎子の三者による統治の時代を、□第二期共立時代□

と呼ぶことにしたい。(第Ⅰ表参照)

□こうしたわけで、――結果から言えば――ほんの短期間のながら□第二期共立時代□が現出したのであろう。

米

次頁来 結私

なお人 ㊦2802P-3/2

コクヨ ケ-20 20×20

な、ゆうがいかん
内憂外患

応神天皇が崩御された直後の「王位継承法」は、――それ以前とは、すいの趣きを異にしていたようである。

一部重複するが、すでに述べたように、

● 三九四年九月九日にお崩れになった応神天皇の遺骸は、約三年間「日辺国」（近畿地方）へと船で運ばれることになっていたのであろう（第四十六章〈応神天皇の薨去〉の項において既述）。

● 一方、

「皇位は一日も空しかるべからず」

という応神天皇の遺詔に従い、応神天皇薨去直後ただちに二人の新たな大王（仁徳天皇および宇治天皇）が即位されたのであろう。（第四十七章の冒頭において既述）結果的にはついに実現しなかったとはいえ、

● また下記の、となり先の、ながら高塚からに

徳。宇治両天皇が誕生された後の最初の後国の正月（周暦の正月。陰暦十一月中の卯の日）の大嘗祭において、天神地祇や祖先神によって認知されることにより、――晴れて正式に皇位が確定し、正式に第二期共立時代を迎える手筈になっていたのであろう。

と推察される。（第24表（夏暦（＝陰暦）・殷暦・周暦の相互関係）参照）

ところがそんな折、記紀にしるされているような、大山宇皇子の反逆事件が起こった。

四十六帝（応神天皇の遺詔）の項において既述。但し、その詳細については省略する。

しかも、朝鮮半島の方では、

応神天皇薨去の年（三九四）八月、高句麗の広開土王が、国の南部に七城を築き、百済の侵入に備えた。

翌年の三九五年八月、百済の阿莘王は、左将の真武らに高句麗討伐を命じた。高句麗の

2,814ﾟ-2/2

次ﾍﾟｰｼﾞ ㊥ 2546ﾟ-4/4

広開土王は、自ら七千人の軍隊を率いて、渡水（大同江もしくは礼成江）のほとりに陣どり、防戦した。百済軍は大敗した、という。（第四十二章八高句麗と百済との絶え間のない攻防〉の項において既述）

翌三九六年、高句麗の広開土王は〈船から水軍を率いて後国（五十余城）の臣民である百済を討ち、多くの城を占領したばかりか、漢江を渡り（125km）百済の王城を攻め、王の弟などを人質として凱旋したのだった。（高句麗の「広開土王陵碑」参

服。第四十二章〈広開土王陵碑〉の項において既述）

国（こく）このような内外の事変により、新大王が正式に認承（にんしょう）される儀式（ぎしき）は、隔（へだ）てて遥（はる）かに先送（さきおく）りされていったように思われる。

紀上386頁 ㊥2811頁

率は本来、しもべのこと である。項羽と劉邦(沛)10頁 ㊥2811頁 大宰帥 元1369頁

一大率（大宰帥）

トル

先に述べたが、仁徳即位前紀に、

「（太子菟道稚郎子は）宮室を菟道に興て居ます」

と記されている。

あるいは、

応神天皇崩御の後、直ちに九州北辺の地の後王となった菟道稚郎子は、宮室を宇治の後の大宰府）に興てて居処とし、――

志倭人伝中にみられるいわゆる由緒ある官職

一大率として、諸国を検察された

のではなかろうか。

というようなことであったろうか。

そして、定かでないが、

ヘミの菟道（大宰府）の一大率が、

さらに後代の大宰帥へ引き継がれていった

のかも知れない。

伝応永版 1ページ 1行

コクヨ ケ-20 20×20

たいせい
体制 元1340
社会組織の様式 おおよそ 元283 元1369
大人

2,817

魏志倭人 47 ㊟ 686

因みに述べると、魏志倭人伝に、

「女王国より以北には、特に一大率を置き諸国を検察せしむ。諸国之を畏憚す。常に伊都国に治す」

と記されており、ここにいう「一大率」は、

「――――」後代の「大宰府」に通ずる性格がある、という。（「大宰府遺跡」鏡山猛、ニュー、サイエンス社、九七十頁参照）

なお、

「大宰帥」は、「大宰府の長官のことであり、八二三年以降、多く「親王」が補任された。

また、「大宰府」は、九州及び壱岐・対馬の二島を管轄し、兼ねて外寇を防ぎ、外交の[redacted]を掌った」

という。（「元辞苑」（大宰帥）（大宰府）参照）

こうした[redacted]は、おおよそ、素戔嗚尊や菟道稚郎子以来の伝統なのであろう。

また、非常に興味深いことがある。

＊後代の統治体制

コクヨ ケー20 20×20

30

①

太でない!

「朝鮮半島南東部、慶尚南道昌寧郡（古代伽耶地方。洛東江流域）の古墳から出土した鉄刀の金象嵌の銘文と、「率」という文字が含まれていることが、ほぼ確実となった。

「率」は、魏志倭人伝などに官職名として用例があり、古代朝鮮の百済の官職としては「達率」「恩率」「徳率」「扞率」「奈率」などがあったと伝えられている。また、後代の大宰帥の「帥」と同音同義との見方もある。

この鉄刀は、一九一九年に発掘され、保管されていた。保存処理のためエックス線照射をしたところ、韓国出土の鉄刀としては初めて金象嵌の七文字の銘文があることが明らかになった。五世紀初頭ごろの鉄刀とみられており、これに近い時期の島根県岡田山一号墳から、よく似た形の鉄刀が出土している。

なお、届けられたエックス線写真を、金石文に詳しい田中俊明関西大講師（古代朝鮮史）が昭和六十二年二月解読し、七文字のうち六

だちそち 達率 日羅 「新や」(1)-181P上

字目が「卒」であることをほぼ確認した。

銘文は刀身の峰の部分に刻まれている。一字目は「乙」、二字目は「亥」、三字目は「年」、五字目は「扞」、六字目は「卒」と読める可能性がある。「卒」の一字が大体確実といえる程度で、さらに多角的な検討が必要である。

この昌寧郡出土の鉄刀の銘文は、当時の伽耶地方が百済の強い影響下にあったことを示し、この地方が百済と古代日本の結び目になっていたことを裏付ける有力な物証となる公算も大きい。

という。（「朝日新聞」昭和六十二年二月二十日付）「鉄刀（韓国出土）銘文に「卒」」参照）

なお、五世紀～六世紀初頭の「乙亥」を探すと、435・495・555年が有る。（第一巻末尾の干支表参照）

・確証はないが、鉄刀銘文中の「扞卒」は、「継体天皇」の可能性がありそうだ。（第一表参

（つまり五字目・六字目を合わせて「扞卒」）

2,819P - 3/2 中国 揚子江 かんばつ 干ばつ 南5Kl-5/6 かんこう 干ばつ 南5K-5/6 14行

かん 扞 大カン 919頁

3692円

照）

• 495年当時、継体天皇が、北九州沿岸地域（筑前国）で、扞率（一大率）としての任に当っておられたのかも知れない。

（＊5ページ 扞 の項）

は、フセギ・ヤモルの意であるとし、宋書倭国伝、武の上表文の第一表（478記）へ雄略天皇の遺詔へ参照、

コクヨ ケー20 20×20

菟道稚郎子の死

菟道（太宰府）の宮室を定めし、九州おおよび海北諸国の鎮撫をその任務とする

菟道稚郎子は、

後王として立つを一大率・菟道稚郎子に居住

高句麗の広開土王の南下を食い止める為、敢

然と下知をくだした。

思い返せば数年前、高麗の王が使者を遣わして後国に朝貢して来た折、その上表文に、

「高麗の王が、日本国に教えるたのでと記されていることに憤りを覚えた菟道稚郎子は、高麗の使を責め、その表を破り捨てたのだった。（応神紀二十八年条）

今、菟道稚郎子と高麗王とは、宿命づけられたかのように海をへだてて対峙した。

しかし、菟道稚郎子の高句麗に対する政策はさとごとく思うにまかせず、広開土王の烈しい気魄の前に重ね重ね口惜しくも後国および百済は惨敗を喫してしまうのだった。（広開土王陵碑参照）

(米)

コクヨ ケ-20 20×20

うぢのわきいらつこ
菟道稚郎子の心の内に、耐え難い自責の念がずっしりと重くのしかかってゆき、――心苦しく遣り切れない思いが鬱々と続いていった。

そんなある日、[illegible]と、菟道稚郎子は、

「皇位を辞退しよう」

と決意した。

その頃、兄の大鷦鷯尊は、菟道稚郎子の失政を補佐する為、難波を後にして、九州へ上ってきておられたのではなかろうか。

うぢのわきいらつこ
菟道稚郎子は、兄に心の内を打ち明けた。

「天下は君として萬民を治める者は、民を覆うことは天の如く、受け入れることは地の如くでなければなりません。先帝が私を太子とされたのは、特に才能があるからというわけでなく、唯愛されたからなのです。

大王（＝大鷦鷯尊）の風姿は立派で、仁孝遠く聞え、年長です。願わくは王、疑われず大倭国および食す国の大王としての帝位についていただきとう存じます。私は臣下と

してお助けするばかりです」

■すると、大鷦鷯尊(おほさざきのみこと)は、

「先帝は前もって明徳の人を選(えら)んで王を立(た)て、貳(ふたり)(二人の皇太子)と為(な)された。それなのにどうして先帝の命に背(そむ)いて、弟王の願(ねが)いに従(したが)い、私(一人)が帝位につくなどということが出来(でき)ようか」

と、固く辞退して受けられず譲り合われた。

■菟道稚郎子(うぢのわきいらつこ)は、決(けつ)して兄の志(こころざし)を変えられないと悟(さと)るや、

「この先、さらにおおめに長生きして、天下を煩(わずら)わすわけにいかない」

と言い、遂(つい)に自殺(じさつ)してしまわれた。

■時に大鷦鷯尊(おほさざきのみこと)は、菟道稚郎子(うぢのわきいらつこ)がなくなられ早打(はやう)ちのたより知らせに驚いて、「あるいは、難波に相当する肥後国の有明海沿岸あたりからであろうか」馬を馳(は)せ、菟道宮(うぢのみや)に到(いた)られた。

■弟が薨去(こうきょ)されてから、三日が経過(けいか)していた。

■大鷦鷯尊(おほさざきのみこと)は、胸(むね)を打ち泣きさけんで、為(な)すべき処(ところ)を知らぬ様子(ようす)であった、という。

(徳即位前紀参照)

トル（まだ殯の期間中）棺の中に横たわっていた

うづのめきいらつこがばねの屍は、葛道の山の上に葬る小前方後円墳の横穴式石室（羨道奥の広い大室）内に運び込まれたことであったろうか。

以下、神代紀上第五段一書第六、および仁徳天皇即位前紀を参考にして、述べてみること。

トル

トル

にしよう。

大鷦鷯尊は、葛道稚郎子を追って、黄泉国（御陵の羨道内）にお入りになった。そして、うづのめきいらつこ葛道稚郎子のもとに着かれた。

その時、兄は髪を解き、弟の屍に跨り、

「我が弟の皇子よ」

と三たび呼ばれた。

髪を解き屍に跨り死んだ人の名を三たび呼ぶことが呪いとなっていたのだろうか。

うづのめきいらつこ葛道稚郎子は、たちまち生き返られ、自ら起きられた。ーーーー大鷦鷯尊は、そうお思いになった。

ここに、大鷦鷯尊は、

「悲しいことよ。惜しいことよ。どうーて

H2、10、28 (日)
H4、6、10
H11、3、5

かけつける 馬 小林 1078P

2,824P

とうかつ 統轄 元1561P 帝位 紀上383P 1行 紀上388P 宇治谷上213P 井上339P

自殺[illegible]されたのか。若し死なれたと知れたら先帝は我のことをいかがお思いになる[illegible]ていようL

と仰せられた。

すると、↑↑↑↑菟道稚郎子の声が聞えた。

「天命なのです。誰も留められるものではありません。もし先帝のみもとに参[illegible]ますことがありましたら、具に兄王が聖で、屢々大倭国・日辺日本国の全土を統轄する帝位につくことを辞退されたと申し上げましょう。

あなたは、私が死んだとお聞きになって、遠路を急いで恥かけつけて下さいました。お礼を申し上げねばなりません。云々L

[illegible]しかしそののち、菟道稚郎子は、また棺に伏して甕にられたようである。もはや、声は聞えなかった。

こうして、宇治天皇は、菟道(太宰府)の山の上に葬られた。

しかし、後代、――宇治天皇の墓は山城国宇治郡へ遷された、と推察される。

コクヨ ケ-20 20×20

朝鮮半島の歴史

先述のように、

(イ)「三九四年九月九日、応神天皇が薨去された」（記）

(ロ)「その直後、倭国では内乱（大山守皇子の反逆事件）が起こった」（記、紀）

という。

こうした報は、逐一、広開土王のもとへ伝えられたに違いない。

三九五年当時、碑霊（沃沮地方）と戦っていた広開土王にとって、――それは、まさに朗報だった。（広開土王陵碑参照）

帝位継承期に内乱まで勃発している倭国が①朝鮮半島に大軍勢を投入するなどは難しかろう。

この絶好の機会を逸してはならない。

三九五年、広開土王はみずから軍の陣頭に立ち、□□の碑麗を急いで討伐すると、白肯への猛攻撃を開始した。（宇遅能和紀郎子の軍）

三九六年、広開土王が船ら水軍を率いて百済国へとせまってきた。百済軍と倭軍とは、一体となって果敢に戦ったのだろう。

しかし、広開土王の軍は強かった。百済北

部の多くの城(五十余城)が、次から次へと高句麗軍に攻め落され、奪われていった。

これを不本意とする百済王は、なおも敢えて出て交戦したが、如何せん、ついに降伏の止むなきに至った。

広開土王陵碑に、

「百残・新羅ハ旧是属民、由来朝貢ス而倭以辛卯年来渡海、破百残口口羅、以為臣民」

と刻まれているように、百済と新羅とは、昔くは高麗(句麗)に隷属し、朝貢していた。(第四十一章〈海北の国々の目まぐるしい動向〉の項において既述)

いま、このようにして、再び高麗は、百済北部の多くの城を占領したばかりか――百済王に□奴客□(ていりのもの)となることを誓わせて□属民□とし、百済王の弟等を人質にとって凱旋した。

この大敗は、百済国のみならず、倭国にとっても〈無念至極であった。

とりわけ〉宇遅能和紀郎子の苦悩は、はなはだしかった。

うぢのわきいらつこ

宇遅能和紀郎子は、いたまーくも皇位を辞

退したいと決意され、乃ち自らの命を絶たれたのだった。（既述）

そして、宇遅能和紀郎子が自害されたので、

――先帝応神天皇が望まれた、

□芙立の時代には、突然、終った。

□大鷦鷯尊が、□大隅国（九州地方）および□日辺日本国（中国・近畿地方）の全域を治められることとなった。

□しかし□仁徳朝の初期の頃にも、――朝鮮半島の方では、引き続き、激しい戦闘が繰り返されていたようである。

すでに述べたことと一部重複するが、仁徳天皇の御代の□と思われる□朝鮮半島の歴史について、予め見ておくことにしたい。

（前に述べた通り）

三九六年、広開土王は、船ら水軍を率いて百済国を討ち、五十余城を占領した。

しかしなお抵抗があったので、漢江を渡り王城を攻めた。

百済王は、多くの貢物を出し、家臣となる

ことを誓った。

（高句麗王）は、（百済）王の弟などを人質として

ここに、

三九九年、広開土王は（三九六年の誓いを

破って倭国と和通している百済を討つため、

平壌にでむいた。高句麗へやってきて（こう願い出た。

「多くの倭人が新羅へ侵入し（新羅）王を倭の臣

下としました。どうか、高句麗王の救援をお

願い致します」

と願い出た。

そこで、四〇〇年、広開土王は五万の大軍

を派遣して新羅を救援した。新羅城に至る

と、其の中に満ちていた倭軍が退却したので

これを追って任那加羅に迫った。

するとその時、任那軍の別働隊であろうか、安羅

人戍兵が逆をつき、新羅の王都を占領した。

「倭の五王」和歌森太郎、文英堂、一五一頁

「広開土王の軍は」

「古代朝鮮」井上秀雄、日本放送出版協会、昭和五十六年七月一日（第十九刷）発行、三七頁参照

「何を小癪な」

とばかりに（）すぐさま新羅へとって返し、

その王城を確保した。

新羅王は、この広開土王の救援を感謝し、高句麗の家臣として朝貢した。（「古代朝鮮」井上秀雄、日本放送出版協会、一三七頁参照）

つまり、百済に引き続き、新羅もまた高句麗の属民となった。

四〇二年、新羅の奈勿王が薨ずると、高句麗に人質として永遣されていた実聖が新羅王となった。

実聖は、即位すると早速、奈勿王の子の未斯欣を人質として倭国に送った。（新羅本紀参照）

一方、この年（四〇二）の五月には百済から倭国へ使者が遣わされ、翌年（四〇三）の二月には倭国の使者が百済へやってきた。（百済本紀参照）

百済と倭国との間で、密かに、策が練られていたのではあるまいか。

四〇四年、倭軍は帯方地方（今の黄海道地方）へ侵入し、軍を進めていった。

八年前（三九六年）、高句麗の広開土王によって奪われたかつての百済北部地域を（倭

国が表に立って奪い返そうとしたと推察される。

● しかし、

「倭寇潰敗、斬殺無数」

であったという。（広開土王陵碑）

● 恐らく、

〈倭国と百済との連合軍が、広開土王の軍に大敗北を喫した〉

という意味なのであろう。

だが、高句麗にとって、倭国と百済とはまさに追っても追っても舞い戻ってきて刺す虻みたいな存在だった。

● 高句麗の広開土王は、次の倭軍・百済軍の侵入を予想し、

「何時なりとかかって来い」

とばかりに待ちかまえた。

四〇七年、広開土王は、歩騎五万もの大軍を派遣し、今の京畿道北部で鎧と兜一万余領の戦利品を得るほどの大勝をした。（広開土王陵碑）

（歩兵と騎兵）

すなわち、百済と倭国の連合軍は、またもや高句麗軍に大敗した。

（「古代朝鮮」井上秀雄、日本放送出版協会、七五、一〇二、一三七頁参照）

こうして、希代の英雄高句麗第十九代広開土王（三七四～四一二）は、人々に惜しまれながら世を去った。

広開土王の功績をたたえ、顕彰（あきらかにあらわすこと）するため、その没後二年（四一四）の二年（四一四）の二年（四一四）の

㊥2878"−2/2 ㊦2885"−2/2 なお、発掘 ㊦1797' ニヒ

がいこう 外交 ㊦351P 国際間の交渉

特筆すべき。 ㊥2835"−1/2 399 410

12年98 1年98 11

㊥2811" ㊦2858"

トル ㊥2885"−2/2 同文 ㊦2878"−2/2 同文

ことの ㊥1890' 碑も面め人 カロク1599' 並え1129' 無（ ）

㊀ところで、

①広開土王（三七四〜四一二）の功績をしるした㊁広開土王陵碑㋑の碑文を見るかぎり、

へ四〇七年に鎧と兜一万余領を得たゝ

最後として、――それ以降、広開土王薨去（四一二）迄の五年間、「百済や倭国と戦った」という記述がない。

トル

という㊁点が注目される。

②一方、㊁日本書紀㋑には、

「仁徳天皇の十二年（四一〇か）七月三日、このころに高麗国が、鉄の楯と、鉄の的を貢上した。云々」

第一表参照 ㊦

とある。（第四十八章へ高句麗との親睦ゝの項において詳述したい。）

㊀といったことから推し測ると、四〇七年以降のその当時へ多分へ

へ仁徳天皇の外交手腕によって へ

㊁高句麗㋑と㊁倭国㋑との間に、戦争終結の講和が成立したのであろうゝ

ニヒ

㊦ 北史 列伝 198 大ロク 215 並え 無（

㊦ 日本書紀 巻十一 仁徳 六十七年 399年と合致する。

46

古代朝鮮 138°

と想像される。

■とはいえ、やがてまた両国間の国交は険悪なものとなる。

■次のように解説されている。

「この当時の高句麗は、征服王朝の性格をもち、朝鮮半島の大半（南端部以外）、今の中国の遼寧・吉林両省の大半、黒竜江省の南部からソ連領沿海州に及ぶ高句麗最大の版図をもっていた。新羅もその一部に入る。

高句麗の新羅に対する支配はかなり厳しいもので、新羅王の廃位にまでも介入している。

高句麗軍が新羅に長期間駐留したのは、後軍と戦うためであった。

『三国史記』によれば、五世紀に後が新羅を攻めた記事が一七個所もあり、とくにその前半では後軍との戦闘がほとんど王都ないしはその周辺でおこなわれている。後軍は、新羅とだけ戦ったのでなく、高句麗軍とも戦っているのである」

という。（「古代朝鮮」井上秀雄、日本放

送出版協会、一三八七九頁参照）

■このように、高句麗と倭国とは、百済・新羅を間にはさんで、遠く火花を散らして戦った。

■なるほど、高句麗人達は、

≪かつて「葛是屋民」であった百済・新羅を、――倭国から奪い返して、再び属民にしたい≫

と熱望したに相違ない。

■しかし一方、倭人達は、

――トル

≪天照大神をも仰ぐ≫神功皇后およびトル

≪応神天皇≫が、卑弥呼以来、三三年トルに自ら海を渡り、以って臣民と為した百済・新羅を、――栄光の聖地と見做し≪どんなことがあろうとも、決して失ってはならない≫

と頑に固執し続けたのである。

■つまり、神功皇后および応神天皇によって打ち立てられた朝鮮半島における基盤を失っ

次14へ15 200年も差違した　ひりの131 聖老、紀上362P

けんじ
堅持 こと
かたく保って譲らないこと。

てしまっては、面目が立たないと考えられたのであろう。

■「祖先達がなしとげた偉業を受け継いで堅持し、後代に伝えることこそが、歴代の倭王に課せられた使命である」と思い定めた仁徳天皇以降の各天皇は、財貨を新羅から高句麗の手から取り返し、倭国を頼りにしている百済を高句麗の攻撃から死守しようとして、一一一一一飽くなき執拗さで、負けても負けても、さらに援軍を送り続け、朝鮮半島南部地域をただ一途に倭国の勢力下に置いておこうと務めたように思われる。

■もっとも、仲哀天皇崩御の年（二〇〇）および辛卯年（三九一）には、神功皇后や応神天皇が船ら軍を率いて渡海し、兵を鼓舞して戦ったので、大いに意気は上がり大勝をおさめる快挙をあげ得たといえよう。

■ところが、五世紀日本国内（中国・近畿地方）の統治に力を注ぎ、さらに東海・関東地

面目が立たない
面目

H30(2018)7.19(木)～7.20(4回)
H31(2019)2.16(土)H4.6.21(3回)H11.3.6(土)
令和元(2019)7.22(月)～7.22(3回)
令和2(2020)3.5(木)～3.6(4回)

3/6 下 3/6
3/6

2,834P

介入 かいにゅう 元360P わり込むこと
出御 しゅつぎょ 小林131P おでましになること

方へ の遠征をも企てていたこの当時、倭王が
自ら海北の国へ出陣することなど、もはや出
来得る情況になかった。
・いや、幾度か、海北の国への倭王出御の気
運はあったが実現しなかった、という方が正
しいのかも知れない。
■ともあれ、倭人たちの海北の国々への介入
は、実に、数百年の長きにわたり繰返され
ていった。
・そしてそれは、一一一一六六三年 日本。
白江の戦い
白済連合軍が白村江で唐・新羅連合軍に敗れ
百済が滅亡するまで続く
完全に

*

コクヨ ケー20 20×20

50

283L 3/2 11行 削